

# 巻 頭 言

長崎短期大学 学長  
安部 恵美子

昨年11月26日に出された中教審答申『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン』では、高等教育が目指すべき姿として、高等教育が「個々人の可能性を最大限に伸長する教育」に転換することが期待されるとしたうえで、「何を教えたか」から「何を学び、身につけることができたのか」への転換が必要であるとしています。

知識伝達に加えて能力育成の必要性が高まれば、学生の主体的参画が強く求められます。学生から、大学の授業は刺激がなくつまらないと言われないように、対話により主体性を引出し、大学ならではの知的刺激を与えることが重要です。特に、学習意欲の高い学生に対しては、より高い水準での学習や活動の機会を設け、彼らの満足度を高めることが、大学教育の要諦であると思います。

大学教育とは、本来、教育と研究を一体不可分なものとして、人材育成と研究活動を行う仕組みのことです。教員は、大学の最大の特徴である「教育研究の一体不可分」を常に意識して、自らの研究力と教育力の双方を磨くことで、学生の知的好奇心の高揚を図っていかねばなりません。

しかし、現実には、学習意欲の低い学生や、放っておけばドロップアウトしそうな学生に手を焼き、多くの手間をとることも多く、自らの研究課題にじっくり取り組む時間も限られる状況ですが、言うまでもなく、研究活動への積極的関与は、大学教員としてのキャリアを積むために必須の事なのです。

さて、本年は、本学の研究面では、とても嬉しいことがありました。

日本私立学校振興・共済事業団の「若手・女性研究者奨励金」支援事業に、241件の応募から62件が採択され、本学からは保育学科・藤野正和講師と国際コミュニケーション学科・岩崎千恵講師の2名が選ばれました。若手部門・女性部門のダブル受賞の快挙です！！1人40万円の支援と研究者にとっては充分というには程遠い額ですが、チャレンジングで独創的な研究を応援するという趣旨で、今年度から新たに設けられた、私立大学の研究者に配分するスキームです。お2人の研究発展のチャンスに繋がることを期待しています。

本年は13編の論文・研究ノート・報告が集まりました。

最後に、なかなかかどらぬ原稿の集約状況に心を砕きながら、編集作業に最後まで携わっていただいた紀要編集委員諸氏のご尽力に感謝申し上げます。

新たな元号の時代を間近に控えて

平成31年3月

